

家畜衛生情報

東部地域畜産経営技術推進指導協議会

西部地域畜産経営技術推進指導協議会

666号

2024.11.10

富山県東部家畜保健衛生所

富山県西部家畜保健衛生所

国内養鶏場で高病原性鳥インフルエンザ発生
～県内全ての養鶏場で緊急消毒を実施～ ... 1

高病原性鳥インフルエンザ早くも5事例
発生、発生予防対策の徹底を..... 2

地域防疫演習を開催しました..... 3

移動式レンダリング装置について 3

ランピースキン病が国内で初発生 4

牛マイコプラズマ国内野外株の
現状について..... 4

遮へい壁からの芳香消臭剤散布で悪臭の
不快度を軽減 5

☆令和6年度富山県畜産共進会
(和牛子牛の部) 開催される 5

防疫情報..... 6

牛肉骨粉の豚や鶏用飼料への利用が
再開されました 6

お知らせ 6

国内養鶏場で高病原性鳥インフルエンザ発生 ～県内全ての養鶏場で緊急消毒を実施～



養鶏場での石灰消毒の様子

高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) については、10月17日に北海道厚真町の肉用鶏農場(約2.0万羽飼養)で今シーズン初の発生が確認されました。その後、10月23日に千葉県香取市の採卵鶏農場(約3.7万羽飼養)、10月26日に新潟県上越市の採卵鶏農場(188羽飼養)、10月31日に島根県大田市の採卵鶏農場(約40万羽飼養)、11月6日に新潟県胎内市の採卵鶏農場(約35万羽飼養)で発生し、11月6日現在で、4道県5事例の発生が確認されています(本誌2ページに関連記事)。そのうち2事例は本県に近い新潟県上越市、胎内市での発生であり、県内でもHPAIの発生リスクが非常に高まっていると考えられます。この状況を鑑み、県では県内21箇所の養鶏場を対象に消石灰を配布し、緊急消毒の実施を決定しました。緊急消毒は11月5日から開始しており、22日までには全ての農場で完了する見込みです。

(東部家保環境課 宮本課長)

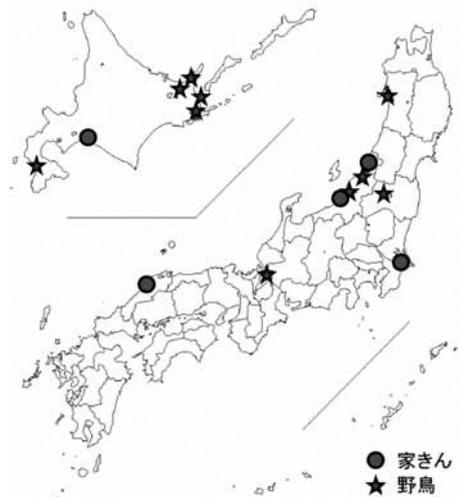
高病原性鳥インフルエンザ早くも5事例発生、発生予防対策の徹底を

家きんにおける高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）の今シーズン初発事例が10月17日に確認されて以降、11月6日現在までに4道県で5事例が確認されています（右図）。10月17日のHPAI発生は、家きんでの発生としては過去最も早い時期の発生となります。また、11月上旬で5事例というのは、過去最多の発生があった令和4年度シーズンと同程度の非常に早い発生ペースであり、今シーズンも各地で多数の発生が危惧される状況です。

野鳥においては、9月30日に北海道で回収された死亡野鳥（ハヤブサ）を皮切りに、福島県、新潟県、秋田県、滋賀県の死亡野鳥・衰弱野鳥等からHPAIウイルスが検出されており（下表）、日本国内の環境中にはウイルスが広く侵入していると考えられます。

隣の新潟県の農場や野鳥で本病が発生している状況を鑑みると、富山県内においても、すでに野鳥によってHPAIウイルスが持ち込まれている可能性は非常に高いと思われます。

HPAIの発生を防止するためには、家きんの飼養者だけでなく、農場に出入りするすべての関係者が危機感を持って予防対策の徹底に取り組むことが重要です。以下に示す対策を再度徹底し、HPAIの発生予防に努めましょう。



令和6年度シーズンHPAIの発生状況
(出典：農林水産省HP一部改変)

農場へのウイルス侵入防止対策の強化

- 1 人、物、車両によるウイルスの持ち込み防止
 - ・関係者以外の衛生管理区域への立ち入りを制限し、出入りの際は車両消毒、手指の消毒を適切に実施
 - ・衛生管理区域専用の衣服・靴に交換、家きん舎ごとに専用の靴を使用（着用前後で動線が交差していないか確認：右上図）
- 2 野生動物の侵入防止、誘引防止対策を徹底
 - ・家きん舎、飼料保管庫、堆肥舎、廃棄卵や死体保管場所等の壁や防鳥ネットを再点検し、破損がある場合には早急に修繕
 - ・ねずみ、害虫の駆除
 - ・鶏卵・鶏糞の搬出口に覆いを設置（右下図）
- 3 家きん舎周囲の定期的な清掃、消毒薬・石灰散布を実施



すのこによる動線の交差防止



集卵ベルト開口部の金網

(出典：農林水産省HP)

健康観察と異状の早期発見

毎日の健康観察を入念に行い、死亡羽数の増加だけでなく、飼養鶏に通常と異なる異状を発見した際には、速やかに家畜保健衛生所へ連絡してください。

令和6年シーズンの野鳥における高病原性鳥インフルエンザ発生状況（11月6日現在）

事例	回収日	場所	検体の種類	種名	亜型
1	9/30	北海道乙部町	死亡野鳥	ハヤブサ	H5N1
2	10/8	北海道別海町	野鳥糞便	ヒドリガモ	H5N1
3	10/16	北海道斜里町	衰弱野鳥	オジロワシ	H5N1
4	10/18	福島県会津若松市	死亡野鳥	コガモ	H5N1
5	10/21	新潟県長岡市	衰弱野鳥	オオタカ	H5N1
6	10/21	秋田県潟上市	衰弱野鳥	コガモ	H5N1
7	10/23	新潟県阿賀野市	死亡野鳥	オオタカ	H5N1
8	10/24	北海道清里町	死亡野鳥	オオハクチョウ	H5N1
9	10/25	滋賀県長浜市	死亡野鳥	ハヤブサ	H5
10	10/25	北海道浜中町	死亡野鳥	オオハクチョウ	H5

(東部家保環境課 宮本課長)

地域防疫演習を開催しました

家畜保健衛生所では令和3年1月の本県初の高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生以降、市町村や関係機関との連携体制を確認し、担当業務についての理解を深めることを目的として、地域防疫演習を毎年開催しています。

今年度の東部家保管内では10月18日に立山町職員の方を対象として、立山町総合公園で家畜伝染病防疫演習を開催し、60名の関係者に参加いただきました。防疫演習では、HPAIが発生した際に実施する防疫措置の流れを確認し、発生農場で作業を担う防疫作業従事者が健康調査や防護具装着のために集まる「集合施設」の設営と運営の訓練を実施しました。発生時に使用予定の「集合施設」を用いて、参加者が協力して午前中に机や椅子、資材等を配置する設営訓練を実施し、午後からは運営訓練として、受付、資材配布、着衣補助の係に分かれ、防疫作業従事者への対応について確認しました。

全国各地でHPAIが発生している中、本県でも関係機関が連携を強化して防疫意識を高め合い、万が一の家畜伝染病の発生に備えていきます。



配布する防護具資材の確認



防護具装着の補助

(東部家保防疫課 先名係長)

移動式レンダリング装置について

10月22日に鹿児島県で開催された「令和6年度鹿児島県豚熱及びアフリカ豚熱防疫演習」において、移動式レンダリング装置（以下、装置）を使用したレンダリング処理の実演が行われました。レンダリングとは高温で熱処理することにより脂肪を溶かし油脂にすること、すなわち化製することで、この装置を用いれば希望する場所に臨時の化製施設ができることになります。

この装置では家畜を投入口に入れるとまず破碎ユニットで細かく破碎され、その後殺菌ユニットで加熱・殺菌されて、約20分で固体と液体が入り混じった生成物となり、排出口から排出されます。1時間当たりの処理重量は5～7tで、24時間連続稼働した場合、1日あたり牛で180頭、豚で2,000頭の処理が可能です。殺菌ユニット内で少なくとも80℃で5分加熱されるため、豚熱ウイルスや口蹄疫ウイルスも死滅します。牛豚ともに生体容積の70～80%の生成物となり、それを密閉容器に入れ、焼却もしくは埋却処理します。

装置は現在、動物検疫所の本所（神奈川県）、北海道・東北支所、中部空港支所及び門司支所の全国4か所に各1台ずつ配備されており、必要とする都道府県があれば貸し付けされます。この装置を稼働させるには装置の設置場所に加え、各種重機の稼働スペースや生成物等の保管場所等、広い土地面積が必要となりますので、どこでも使用できるわけではありませんが、県内でも農家の皆さんが確保済みの埋却場所を実際に掘ってみると水が湧いて使えない場合等、この装置を用いて処理することも1つの方法として検討します。



投入口へ家畜の投入
(左は殺菌ユニット)



排出口で生成物を密閉容器へ収容



生成物

(東部家保検査課 西井課長)

ランピースキン病が国内で初発生

11月6日、福岡県の乳用牛飼養農場において、国内では初めてとなるランピースキン病の発生が確認されました。本病は以前から韓国で発生しており、日本への侵入が危惧されてきました。

本病はランピースキン病ウイルスによる牛の伝染病で、日本では届出伝染病に指定されています。感染した牛の全身の皮膚、特に頸部・背部・外陰部などにできる数個～数百個の結節が特徴（写真）で、水腫やリンパ節の腫大、発熱、泌乳量の減少など各種の症状を呈し、生産性に影響を及ぼします。本病は蚊、ハエ、ダニなどの媒介による機械的伝播、もしくは感染した牛の移動により感染が拡大します。



写真提供：モンゴル国中央獣医学研究所
(State Central Veterinary Laboratory in Mongolia)

ランピースキン病の病変（出典：農林水産省リーフレット）

本病には治療法がないため、発症牛の早期発見、隔離、移動自粛、ワクチン接種等の対策を総合的に実施することで、発生及び感染拡大を防止することが必要です。以下にお示しする対策を実施し、本病の発生を予防しましょう。なお、飼養する牛に本病を疑う症状が見られた際は、当該牛を速やかに隔離するとともに、家畜保健衛生所まで連絡をお願いします。

◆毎日の健康観察

早期発見・早期通報が重要。疑わしい牛は隔離し、牛の導入・出荷・移動時は健康観察を徹底する。

◆害虫の駆除

殺虫剤の散布とともに粘着シート等も活用して、蚊、サシバエ、ヌカカ等の吸血昆虫を防除する。

◆清掃・消毒

衛生管理区域内の整理整頓と、飼養管理に使用する器具や畜舎等の清掃・消毒を徹底する。また、注射針や人工授精用器具など体液が付着する物品は1頭ごとに交換又は消毒を実施する。

(東部家保環境課 宮本課長)

牛マイコプラズマ国内野外株の現状について

農研機構 動物衛生研究部門において、10月22日～10月25日にかけて家畜衛生研修会（細菌部門）が開催されました。その中で、現在国内で問題となっている牛マイコプラズマ野外株の状況について報告がありましたのでご紹介します。

マイコプラズマ属菌は一般細菌と比較して極めて小さく、細胞壁を持たないことが特徴です。高い宿主特異性（感染、共生する宿主の範囲が限られていること）を有しており、牛マイコプラズマ感染症の代表的な原因種には、*Mycoplasma bovis*（以下 *M.bovis*）、*M.bovigenitalium*、*M.californicum* 等が挙げられます。これらは呼吸器病、関節炎、生殖器炎、乳房炎等の様々な牛疾病に関与し、特に *M.bovis* は高い伝染性や病原性を示すため、家畜衛生上最重要のマイコプラズマとして認識されています。

前述のとおり、マイコプラズマ属菌は細胞壁を持たないため、ペニシリン等の細胞壁合成阻害抗菌剤は効果がありません。これに加え、近年の *M.bovis* 国内野外株は16員環マクロライド系抗菌剤（タイロシン、チルミコシン等）や、テトラサイクリン系抗菌剤への感受性も低下していることが確認されています。これは過去に北米等でまん延していた耐性株が国内に侵入した結果であると推測されており、国内で優勢となっている遺伝子型が過去に北米等でまん延していたものと同様であることから裏付けされています。さらに、フルオロキノロン系抗菌剤（エンロフロキサシン等）に対する低感受性野外株もここ最近で散見されるようになりました。治療に先立ち原因株の薬剤感受性を把握しておく等、慎重な抗菌剤使用が望まれます。

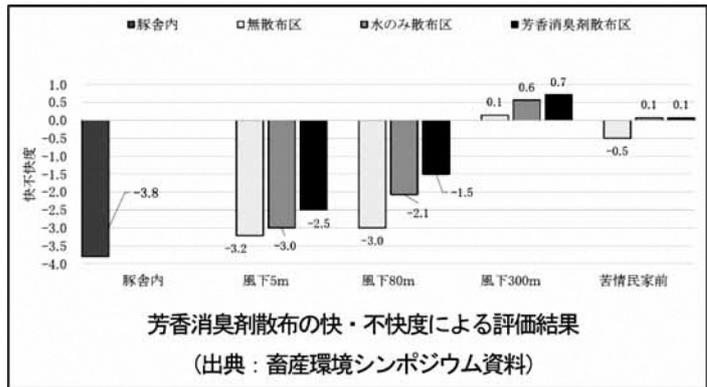
マイコプラズマ属菌による疾病に有効なワクチンは今のところ存在しません。罹患牛の早期発見・早期治療はもちろん、前提として適切な飼養管理（飼養牛のストレス軽減、清掃や消毒による環境中マイコプラズマ属菌の菌量低減等）が重要となります。マイコプラズマ対策を実施するにあたり、ご不明な点等ございましたら、お近くの家畜保健衛生所までお問合せください。

(東部家保検査課 竹中主任)

遮へい壁からの芳香消臭剤散布で悪臭の不快感を軽減

令和6年10月9日、農林水産省と（一財）畜産環境整備機構の共同開催で畜産環境シンポジウムが開催されました。本シンポジウムでは「農場周辺への畜産臭気の不快感を軽減する技術と優良事例」と題して講演がなされ、その中で養豚農場において市販の芳香消臭剤を遮へい壁から散布し、その効果を快・不快感表示法で評価した試験がありましたので、その内容をご紹介します。

快・不快感表示法とは、においの強さよりも質に注目した評価法で、実際に人がにおいを嗅いで快・不快感を数値化する方法です（-4～+4：0を基準としてマイナスが大きいほど不快、プラスが大きいほど快）。この試験では芳香剤散布区、無散布区、水のみ散布区の3区で比較し、遮へい壁に40個の散布ノズルを使用して、1ノズルから15分ごとに2分間、粒径34 μ mのミスト（1分間あたり120～270mLの液量）を噴射する方法で実施しました。農場敷地境界より風下5、80、300m地点と付近の民家前で快・不快感を測定したところ、いずれの地点でも芳香消臭剤散布区で最も改善効果が高くなりました（図）。なお、使用する芳香消臭剤は、農場から発生する臭気成分の種類によって効果に差があるので、実際に使用して効果のあるものを選定することが大切です。また、同じ芳香消臭剤を使い続けると、徐々にそのにおいが新たな悪臭と感じられるようになり、苦情につながる可能性があるため、芳香消臭剤の種類や濃度を定期的に変えるなどの工夫が必要になります。



今後、持続的な畜産物生産を行うためには、家畜排せつ物の管理適正化・利用促進により環境負荷低減を進めることが求められています。畜産経営を続けるにはまず周辺住民との良好な関係を築くことが必要です。本シンポジウムは過去に開催された分の資料も公開されていて、環境対策に関する幅広い情報が得られます。また、本シンポジウム内で畜産農家が行った臭気軽減の優良事例紹介についても畜産環境整備機構のHPに詳細が掲載されています。お時間のある時にぜひ一度ご覧ください。



(東部家保環境課 岡部副主幹)

令和6年度富山県畜産共進会（和牛子牛の部）開催される

10月24日（木）、金沢市の北陸三県家畜市場において、富山県畜産共進会和牛子牛の部が開催されました。出品牛40頭（去勢23頭、雌17頭）の審査の結果、上市町の稲葉浩規さんが出品した「えいこ45の24」（雌）が優等賞1席を、南砺市の上野幸生さんが出品した「一二三夜24」（去勢）が優等賞2席を受賞されました。おめでとうございます。

また、同日開催された令和6年度第4回の北陸三県和牛子牛市場では、去勢92頭、雌56頭の計148頭の取引が成立し、富山県からの出品牛は去勢23頭、雌17頭の計40頭の取引が成立しました。全体の出場頭数は、前回比マイナス37頭で20%の減少となりました。

平均価格は、去勢で532千円（8月市場427千円）、雌で414千円（同371千円）、全体では521千円（同408千円）でした。最高価格は去勢で728千円、雌が591千円でした。

次回の和牛子牛市場の開催は、令和6年12月19日（木）になります。

(東部家保防疫課 宮澤副主幹)



優等賞1席を受賞した「えいこ45の24」

防疫情報

全国の主な家畜伝染病の発生

高病原性鳥インフルエンザ (法定伝染病)

(11月6日現在)

事例	発生日	発生場所	経営形態	飼養羽数	血清型
1	10月17日	北海道厚真町	肉用鶏	約2.0万羽	H5N1
2	10月23日	千葉県香取市	採卵鶏	約3.7万羽	H5N1
3	10月26日	新潟県上越市	採卵鶏	188羽	H5N1
4	10月31日	島根県大田市	採卵鶏	約40万羽	H5N1
5	11月6日	新潟県胎内市	採卵鶏	約35万羽	H5

豚熱 (法定伝染病)

(11月5日現在)

事例	発生日	発生場所	経営形態	飼養頭数	備考
94	11月1日	愛媛県四国中央市	一貫	61頭	

県内の主な家畜伝染性疾患の発生

病名	畜種	発生日	戸数	頭羽数	備考
牛ロタウイルス病と牛大腸菌症	牛	9月25日	1	1	
牛クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症	牛	10月14日	1	1	
牛ロタウイルス病	牛	10月22日	1	3	
豚丹毒 (届出伝染病)	豚	10月22日	1	1	と畜場発見
鶏コクシジウム病	鶏	10月15日	1	1	
鶏クロストリジウム・パーフリンゲンス感染症 と鶏コクシジウム病	鶏	10月15日	1	2	
めん羊の消化管内線虫症	めん羊	10月8日	1	1	

牛肉骨粉の豚や鶏用飼料への利用が再開されました

平成13年9月に国内初となるBSEの確認を受けて、牛肉骨粉(めん山羊由来も含む)を含む動物由来たん白質の飼料利用が禁止されました。その後、製造・使用段階における分別管理を徹底する等のリスク管理措置を講じることを前提として、動物由来たん白質の飼料規制はリスク評価を行った上で段階的に見直しが行われてきました。そのうち牛肉骨粉については、平成27年4月に養魚用飼料で利用が再開されています。

今般、国内におけるBSE発生リスクの低下等を踏まえ、10月3日に牛肉骨粉の豚・鶏等用飼料への利用が再開されました。牛肉骨粉を利用した豚・鶏等用飼料は、容器の専用化や注意事項の表示が行われます。牛・めん山羊用飼料への肉骨粉の利用は従前どおり禁止されておりますので、表示を確認し、誤って与えないようご注意ください。詳しくは、右の二次元コードから農林水産省HPをご覧ください。



飼料への肉骨粉の利用再開状況

: 利用可能 × : 利用不可

	牛用飼料	豚・鶏等用飼料	養魚用飼料
肉骨粉の原料	牛・めん山羊	×	(利用再開)
	豚・馬	×	
	家さん	×	

BSEの原因となる異常プリオンが蓄積しやすい脊髄等の特定危険部位は利用不可

(農産食品課食品安全係 中村技師)

☆ お知らせ ☆

催事等	期日	場所
令和6年度富山県畜産共進会肉牛の部(枝肉)	11月29日	(株)富山食肉総合センター(射水市)

発行所 富山県東部家畜保健衛生所 https://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1687/
〒939-3536 富山市水橋金尾新46 電話(076)479-1106 F A X (076)479-1140
編集者 宮本 剛志(富山県東部家畜保健衛生所)
○最新号は右のQRコードからいつでもご覧いただけます。

